フォートウェイン市 Parkview Health との医療交流を終えて

2013年10月に姉妹都市フォートウェイン市にあるParkview病院との医療交流が開始され、高岡市民病院から遠山院長以下3名のスタッフがアメリカを訪れました。2014年はフォートウェイン市の医療交流団が来高の予定でしたが、台風の影響にて中止となり、残念な結果となりました。2015年は一昨年に続き、高岡市からフォートウェイン市に医療交流団を派遣する運びとなり、4名の市民病院スタッフがアメリカを訪れました。

フォートウェイン市にあるParkview病院は、インディアナ州の中でも大きな急性期病院であり、パークビューレジオナルメディカルセンター（Parkview Regional Medical Center 、PRMC）を中心とし、周辺に Parkview Heart Institute（心臓病センター）、Parkview Women's and Children's Hospital（産科、小児科病院）、Parkview Ortho Hospital（整形外科、外傷センター）、Outpatient Center（外来センター）、Parkview Cancer center（がんセンター）、Parkview Physicians Group（周辺開業医）等の施設を有し、一大病院群として Parkview Health と呼ばれています。今回は交流の目的をがん治療に絞り込み、Parkview Cancer center を中心に訪問してまいりました。

当院からの訪問スタッフは、薮下和久医療局長（外科）、河上裕子看護師長（緩和ケア認定看護師）、村本和宏薬剤師、円戸　望研修医の4名です。10月24日に日本を発ち、10月26日から30日までの5日間、現地のスタッフとの間で医療交流を行いました。

最初の2日間は、Parkview Health の医師、看護師、薬剤師、事務職員との間で日米間の医療事情の違いに関し発表を行い、ディスカッションいたしました。最初に総論として日本の医療現状、特にアメリカ側からの関心の高い、国民皆保険制度、DPC＆PDPS 支払システム、癌診療連携拠点病院につき説明を行い、その後各論として、胃癌診療、大腸癌診療、乳癌診療、癌化学療法、放射線治療、緩和ケアに関し討論を行いました。国民皆保険制度に関しては、オバマケアが話題になったように、アメリカ医療界でも関心の高い制度であり、アメリカでの民間保険との違いに関し多くの質問を受けました。各論においては、癌の外科手術治療、抗がん剤による化学療法、緩和ケアに関しては日米間に大きな差はないように感じられましたが、放射線治療に関しては、アメリカの施設の充実度、専門職員の数、対象疾患の数が多いことに驚かされました。日本における放射線治療の遅れが感じられ、今後の日本の癌放射線治療の大きな課題と考えられました。

後半の3日間は shadowing と称して、アメリカ側のスタッフに同行して実際の院内の医療現場を見学しました。薮下、円戸の医師グループと河上、村本のコメディカルグループに分かれて見学を行いました。医師グループは内視鏡治療、乳癌、大腸癌の手術見学、整形外科診療の見学、放射線治療の見学を行いました。

Parkview Health は年々組織が拡大しており、一昨年の訪問時からは建物数も職員数も増えていました。周辺開業医群も含めると、ベッド数は約 500、医師約 700 名、看護師約 1400 名、総従業員数約 9600 名と巨大な企業です。癌患者も大変多く、大腸癌手術症例は

年間約 170 例と高岡市民病院の約 2 倍の件数です。最も手術件数の多かった乳癌症例にいたっては、年間約 700 例と高岡市民病院の約 10 倍、富山県全体の年間手術件数よりも多い症例数でした。内視鏡外科手術に用いる手術ロボット(Da Vinci)も 3 台導入されており、前立腺癌、子宮癌、直腸癌手術に使用されていました。手術室は中央手術棟に 18 部屋、地下棟に 4 部屋、心臓病センターに 5 部屋計 27 部屋を有し、これに加え外来手術室が 2 部屋あります。それぞれの手術室に部屋専属麻酔医が常駐し、同じ麻酔医が部屋を移動することなく 1 日の業務をこなしていました。麻酔医が 35 名常勤するということにも驚かされましたが、少ない麻酔医が時間差で各手術室を駆け巡る日本と違い、医療安全の面からも合理的な方法と考えられました。

放射線治療分野では、体外照射装置(liniac)が 2 台、ロボット放射線治療装置(Cyber knife)が 1 台、計 3 台がフル活動され、1 日に 70~80 名の患者に治療が行われていました。放射線治療専門医が 5 名、Physicist と呼ばれる専門放射線技師が 3 名、専門看護師が 4 名配置されていました。現在の Parkview Cancer center は事務部門や会議室がある建物であり、実際の手術や放射線治療は PRMC の設備の中で行われているわけですが、2 年後の 2017 年 11 月には Parkview Cancer Institute という癌センターが約 80 億円の予算で建設され、手術室や放射線治療など、癌に関する治療室がすべてセンター内に統括されるそうです。今回訪問時には幸運にも Parkview Cancer Institute の棟上げ式があり、そのパーティーにも招待していただきました。

Parkview Health は癌治療以外でも大変多くの患者さんが利用している超急性期病院です。平均在院日数は大変短く、患者ローテーションが目まぐるしい状況です。大腸癌患者の平均在院日数は約 4 日と高岡市民病院の約 14 日と比べ大きな隔たりがあります。アメリカでは個人の民間医療保険を使用するために、長期入院は保険会社からクレームが生じるため早期退院が当たり前になっているようです。また、日本では一般的に「退院＝社会復帰」と考えますが、アメリカでは退院後も周辺の開業医やホームドクターを利用した医療が続けられており、退院に対する認識が日本と異なるように思われました。在院日数が短いことから、1 日の業務量は大変多く、特に看護師の仕事量が多いという問題点が挙げられていました。効率性を追求するために、クリニカルパスの導入、PDCA サイクルの活用など、日本と同様に業務改善に努力されていました。Parkview Health の看護師は約 1400 名と多く、中でも医師同様レベルの診断や治療が行えるナースプラクティショナー（NP）が約 150 名存在し、医師業務を代行しています。今後日本でも、認定看護師や NP の必要性が高まると思われました。

最終日の晩には、Cancer Oncology 部門のチーフの自宅で行われたホームパーティに招待されました。ちょうど Halloween の時期であり、自宅内外には Halloween 用のデコレーションがなされており、日本では経験できない素敵なパーティでありました。

1 週間の医療交流を終え、感じたことは、アメリカ医療においては、各職種の専門性が確立されており、医師、看護師、薬剤師、経営事務の役割が明確にされているということで

した。各職種が自分の業務に誇りとやりがいを持って行っている様子が伝わってきました。民間病院と市立病院という違い、また職員数にも大きな差はありますが、職種間の役割分担、専門性の確立という点で、我々の病院も見習うべき点が多々存在するように思われました。

わずか 10 日間という短い期間でしたが、今回の医療交流にて、アメリカ式癌治療、病院設備、病院経営など多くのことを学びました。また病院外においても、市長表敬訪問、アメリカの Halloween ホームパーティの経験など、大変充実した有意義な時間が過ごせました。医療交流の実現に尽力していただいた高岡市民病院、高岡市役所の関係者の皆様、フォートウェイン市姉妹都市交流関係者の方々、パークビュー病院関係者の方々に御礼を申し上げます。

2015 年 12 月

高岡市民病院　医療局長

藪下　和久